

「-みたい」の史的変遷

岩崎 真梨子

1. はじめに

現代語の「-みたい」には、以下のような例が見られる。

(1) 眼鏡かけた蛙みたいな顔してるけど、あれで、とても自然でいいんだなあ。

(曾野綾子「太郎物語 大学編」1979〈昭和54〉)

(2) 「お前みたいな小娘に、社長がつとまってたまるか！」

(赤川次郎「女社長に乾杯！」1982〈昭和57〉)

(3) 「ディスコをやめた時、うちのやつはまさかボクシングをやるとは思わなかったみたいなんだ。やりたいことがあると言っていたんで、残した金で何か別の仕事を始めるんだらうと思っていたらしい。

(沢木耕太郎「一瞬の夏」1978〈昭和53〉)

これらの例を見たとき、(1) (2) と (3) で意味・用法が異なることは明らかである。

(1) (2) が、上接部（眼鏡かけた蛙・お前）で被修飾語（顔・小娘）をたとえているのに対し、(3) は話者が「うちのやつは（自分が）まさかボクシングをやるとは思わなかった」と推量していると考えられる。

上に示した「-みたい」と同様に、意味・用法が分けられる形式として、「-らしい」や「-ぼい」が挙げられる。これらはいずれも、「彼はとても男らしい」や「この酒は水っぼい」といった接辞の用法が見られたのち、「スカートを履いてはいるが、どうやらあの人は男らしい」「このコップに入っているのは、酒じゃなくて水っぼい」のような、話者がもの・ことをどう捉えているかを示す用法が見られるようになる。これに類推するとすれば、「-みたい」についても先ず (1) (2) のような用法が見られ、のちに (3) のような用法が見られると推測される。

「-みたい」の意味・用法の変遷において、(3) のような推量の「-みたい」はいつ頃から、どのようにして見られるようになるのだろうか。本稿の目的は、「-みたい」の意味・用法について、特に推量用法が見られるようになる経緯を、歴史的に明らかにすることにある。

2. 先行研究

「-みたい」を歴史的に検討する先行研究としては、「-みるようだ／みたようだ」から「-みたい」への推移を示すものが主であり¹、近現代から現代にかけて「-みたい」の意味・用法の変遷を明らかにするものは、現時点では見当たらない。ここでは、現代語の「-みたい」の意味・用法がどのように分析・分類されているかを確認しておきたい。

森山（1995）では、「-ようだ」「-みたい」の意味を、「推量的な意味」「比喩的な意味」「例示的な意味」の3つに分けられている。以下、森山（1995）で挙げられている分類を引用する。

- (1) ライオンのような（／みみたいな）動物がアフリカで取ったビデオに写っていた。
→ライオンかどうかわからない。：推量的な意味：不明関係
- (2) ライオンのような（／みみたいな）犬がいた。
→ライオンではない。：比喩的な意味：不一致関係
- (3) ライオンのような（／みみたいな）肉食動物は生肉からビタミン類を摂取する。
→ライオンもそうである。：例示的な意味：包容関係

本稿でも、「推量的な意味：不明関係」「比喩的な意味：不一致関係」「例示的な意味：包含関係」を参照する。これに基づくと、「-みたい」が推量的な意味を示す場合の重要な条件として、たとえるものととえられるものが不明関係であることが挙げられる。

前田（2006）では、類似事態を表す「ように」を、《様態》《比喩》《同等》に分けられている。以下、前田（2006）で挙げられている用例を参照する。

《様態》

「やっぱりそうだったの」真理はつぶやくように言った。（女の小箱） 【p.13】

《比喩》

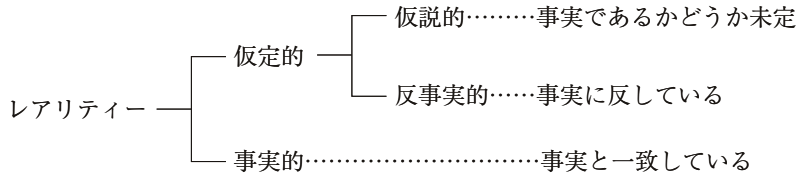
暖かい日射を浴びて花は幾重にも花を重ね、弦音に誘われるように花片がはらはらと散りかかった。（草の花） 【p.19】

《同等》

人に生命があるように、植物にも生命がある。 【p.24】

三者の大きな違いとして、修飾節と主節それぞれに表れる述語（「Aする」と「Bする」）の意味的な類似度と、前件のリアリティーを挙げられている。リアリティーの定義は以下の通りである。

¹ 他に、近世の「-みるようだ」「-みたようだ」について述べられているものも、広くは「-みたい」の先行研究としてよいと思われる。たとえば、鈴木（2002）・鶴橋（2002）が挙げられる。しかし、これらの先行研究は今回の論旨とは直接関わらないため、ここで取り上げるに留める。



以上を踏まえ、《様態》《比喩》《同等》を次の通りまとめられている。

		前節と後節の述語の関係	リアリティー
類似事態	様態	前節ル形 = 同類 (後節の下位概念) 前節タ形 = 異類 (感情・思考)	仮説的
	比喩	異種	反事實的
	同等	同位	事實的

前田 (2006) は、リアリティーという分類基準を設け、「-ように」に仮説的・事實的なことを表すことが可能であることを述べている点で重要であると思われる。

本稿では、「-みたい」が推量用法を示す「不明関係」の例がいつ頃からどのようにして見られるようになるか、「-みたい」が示すものと事実との関係 (事実がどうか未定・事実と一致・事実と反する) がどのように変化するのかといった点を明らかにする。

3. 調査資料と用例数

史的変遷を示すにあたって、調査資料と用例数を以下に示す。

【調査資料】

■データベース^{*2}

『明治の文豪』『大正の文豪』『新潮文庫の100冊』『太陽コーパス』

■文学作品・小説

昭和：獅子文六『自由学校』(1951) 赤川次郎『ヴァージン・ロード』(1983)

平成：川上弘美『センセイの鞆』(2004) 豊島ミホ『青空チェリー』『檸檬のころ』(共に2005) 吉川トリコ『「処女同盟」第三号』(2005) 日日日『ピーターパン・エンドロール』(2006) 三崎亜記『となり町戦争』(2006) 山崎ナオコーラ『浮世でランチ』(2006) 伊坂幸太郎『ゴールデン・スランバー』(2007) 奈須きのこ『DDD』1・2巻 (2007)

² 『明治の文豪』『大正の文豪』『太陽コーパス』については全作品を調査。『新潮文庫の100冊』については、翻訳作品を除外した。

■新聞記事

「毎日新聞」「産経新聞」（共に1997年）

■雑誌

『ダ・ヴィンチ』（1994・1995・2007・2008）『an・an』（1994・1998・2006）『FRaU』（2003）『non-no』（2007・2008・2011）『mina』（2007）『MEN'S NON-NO』（2008）

■漫画

空知英秋『銀魂』（2006-2008）西炯子『甥の一生』（2009）藤原ここあ『妖狐×僕SS』（2010-2011）『dear』（2011）樹なつみ『花咲ける青少年』（2011）

【用例数】

明治	大正	昭和	平成	合計
8	122	1175	651	1956

4. 「-みたい」の史的変遷

ここでは、明治期から現代にかけての「-みたい」の意味・用法の史的変遷について検討する。1節・2節でも述べた通り、推量用法が見られるようになるのはいつ頃かを明らかにすることを焦点とする。

4-1. 接辞の用法のみが見られる時期 —明治期～大正前期*3—

「-みたい」は、明治期の終わり頃より見られる。ただし、明治期から大正前期までは、推量用法はまだ見られない。

まず、たとえるものがたとえられるものの一例となる例が見られる。

(4) 本当に芳子さんはああいうしっかり者だから、私みたいな無教育のものでは……]

(田山花袋「蒲団」1907〈明治40〉)

ここでの「無教育のもの」というのは私の性質の一つであり、また、「私」は「無教育のもの」の一例として挙げられていると考えられる。「無教育のもの」のなかに「私」が含まれており、例示用法の例ではないかと思われる。

また、あるものを、それとまったく異なるものでたとえる例も見られる。

(5) お延は微笑しながら所謂犬みたいな男の子の談話に耳を傾けた。

(夏目漱石「明暗」1916〈大正5〉)

たとえられるもの（男の子）は、たとえるもの（犬）とは明らかに一致しない。なお、この例の前文脈には、

「一さんは犬みたいよ」と百合子がわざわざ知らせに来た時、お延はこの小さい従妹から、彼

*3 大正7年以前とする。

がぱくりと口を開いて上から鼻の先へ出された餅菓子里に食い付いたという話を聞いたのであった。

とあり、「ぱくりと口を開いて～食い付いた」という仕草から男の子を犬にたとえていることが分かる。この例は、比況用法の例と考えられる。

以下、今期の用例を詳しく見ていきたい。

●例示用法

今期の例示用法は、人称代名詞を承ける例に偏る。

(6) a あなたと倉地さんとのこれまでの生活は、僕みたいな無経験なものにも、疑問として片付けておく事の出来ないような事実を感じさせるんです。

(有島武郎「或る女」1911-1913〈明治44-大正2〉)

b 美人でさえそうなんだから君みたいな野郎が窮屈な取扱を受けるのは当然だと思わなくっちゃ不可ない。

(夏目漱石「彼岸過迄」1912〈明治45〉)

(7) a 「私みたいに暢気だと好いんですけど……」(田山花袋「田舎教師」1909〈明治42〉)

b 「君みたいに無暗に上流社会の悪口をいうと、早速社会主義者と間違えられるぞ。

(夏目漱石「明暗」1916〈大正5〉)

(8) 「何方も酔ってるんだよ。小僧の癖に」と岡田が云った。

「貴方みたいね」とお兼さんが評した。

「何方がです」と佐野が聞いた。

「両方ともよ。吐いたり管を捲いたり」とお兼さんが答えた。

(夏目漱石「行人」1912-1913〈大正元-2〉)

これらの例では主に人物の性格や性質、言動について述べられており、ある人物にとって半永久的な特徴を表す。性格や特質は容易に変わるものではなく、言動についても常日頃からよくしていることが相当する。

また、次のような時間や期間を上接部とする例が見られる。

(9) 「厭よ又此間みたいに、西洋烟草の名なんか沢山覚えさせちゃ」

(夏目漱石「彼岸過迄」1912〈明治45〉)

(10) 『由さん、ほんたうにあんたはおとなしい人ね。妾はおとなしい情のある人は好きよ。もうこの間の晩みたいなことは、しつこなしよ。さうすれば妾は可愛がつてあげるわ』

(小川未明「悪人」1917〈大正6〉)

これらの例では、被修飾部がその時間・期間に起こった事柄を表している。たとえば(9)では、上接部「此間」に「西洋烟草の名を沢山覚えさせたこと」が実際にあったと考えられる。(10)は、この台詞だけ見ても「この間の晩」に何があったのかは特定できないが、会話をしている者同士は実際に起きたある事柄を想起していると読み取れる。

以上の通り、今期の例示用法では、上接部/被修飾部で示されるもの・ことが実際に存在する、あ

るいは起きている。「僕みたいな無経験のもの」では「僕」は実際に存在する人物で、無経験という性質を有している。また、「この間みたいに西洋煙草の名前を覚えさせる」についても、「西洋煙草の名前を覚えさせたこと」が過去に実際に起きた事柄である。

●比況用法

続いて、比況用法の例を挙げる。

- (11) ……持つて来なんだから、ひどい目に遭はしたる。』と、重公は虎みたいな凄い顔をしたと思ふと、またニツと笑つて、
(上司小剣「狐火」1917〈大正6〉)
- (12) 若白髪みたいに、たまさかキラ／＼してゐる銀貨をば、
(上司小剣「狐火」1917〈大正6〉)
- (13) 治作さん、お前一遍みんなの醜態を見てみねえ。それは可笑しいよ。みんな子供みたいに、洋服の腕の所に赤い印を付けてるだ。
(福永渙「治作と米造」1917〈大正6〉)
- (14) それも彼がお重から、あなたの顔は将棋の駒みたいよと云われてからの事である。
(夏目漱石「行人」1912-1913〈大正元-2〉)

以上の例では、たとえるものとたとえられるものが異なる。(11)を例とすると、「重公の顔」は「虎の顔」ではない。従って、例示用法の「君みたいな臆病者」のような、「君」は臆病という性質を有し、臆病者のひとりであるという包含関係は成り立たない。ただし、たとえるものとたとえられるもの間には、共通の性質が存在する。(11)であれば、恐ろしい表情であることが共通の性質であると考えられる。

また、次のような「-みたいなもの」という例も見られる。

- (15) 自分は彼がもと書生であった頃、ある正月の宵何処かで振舞酒を浴びて帰って来て、父の前へ長さ三寸ばかりの赤い蟹の足を置きながら平伏して、謹んで北海の珍味を献上しますと云ったら、父は
「何だそんな朱塗りの文鎮みたいなもの。要らないから早く其方へ持って行け」
(夏目漱石「行人」1912-1913〈大正元-2〉)

- (16) a 「そんなに雑作なく出来るんですか」
「ええまあ笑談みたいなものです。ごくごく大袈裟に云った所で、面白半分の悪戯よ。だから思い切つて遣ると仰しゃい」
(夏目漱石「明暗」1916〈大正5〉)
- b 『何うでそんなこつちやろ。良い衆ちうもんは小前のもんを苛めて、可味い汁吸ふのが仕事みたいなもんぢや。喧嘩したて良い衆は損しやへんさかひなア。……………』
(上司小剣「狐火」1917〈大正6〉)

こういった例では、「-みたいなもの」全体で何かをたとえていると考えられる。たとえば(15)は、赤い蟹の足を朱塗りの文鎮にたとえている。

なお、(16)のような「~みたいなものだ」の形は、現代語でみると、グループ・ジャマシイ(2000)で述べられている用法に同様ではないかと思われる。グループ・ジャマシイ(2000)では、「-みたい」の意味・用法に[Nみたいなものだ][V-たみたいなものだ]という項目を設けられており、以下の

2例を挙げられている。

- a 僕の給料なんか、会社の儲けに比べたら、ただみ^{ママ}たいなものさ。
- b <野球をみながら>こんなに点差があれば、もう勝ったみ^{ママ}たいなものだ。

これらの意味については、

「まだ現実にはそうになっていないが、ほとんど確^{ママ}実にそうなる」あるいは「ほとんど同じと言ってよい状態である」という意味を表す。

のように記述されている。

(16) は、もの・ことの性質について述べられており、未実現の事柄をたとえているとは考えにくいので、「ほとんど同じと言ってよい状態である」と取ってよいであろう。ほとんど同じということはまったく同じということとは異なり、「-み^{ママ}たいなもの」が比況用法であることを示していると思われる。

4-2. 共起副詞に見られる意味・用法の差異 —例示用法・比況用法—

以上見てきた通り、「-み^{ママ}たい」の接辞の用法は、明治期から例示と比況に分かれていると考えられる。両用法は、森山(1995)で指摘される通り、例示用法ではたとえられるものとたとえるものが包含関係であり、比況用法では不一致関係である点で異なる。

意味以外に、例示用法と比況用法では共起副詞が異なる。

- (17) a 「相変らず偏窟ね貴方は、まるで腕白小僧みたいだわ」

(夏目漱石「彼岸過迄」1912〈明治45〉)

- b 引き立てようとすれば、却って引き下がるだけで、まるで紙袋を被った猫みたいだね。

(夏目漱石「明暗」1916〈大正5〉)

- c 「天眼通ですな」

「天眼通じゃない、天鼻通と云って万事鼻で嗅ぎ分けるんだ」

「まるで犬みたいですね」

(夏目漱石「明暗」1916〈大正5〉)

- (18) たゞじつとしてゐました。まるで馬鹿みたいになつてゐたのですね。

(中村星湖「みじか夜」1917〈大正6〉)

(17) はすべて夏目漱石による例だが、比況用法では「まるで」が共起している。これに対し、今期の例示用法ではそういった共起副詞は見られない。

4-3. 接辞の用法において意味変化が起こる時期 —大正後期～昭和前期—

大正後期から昭和前期にかけても、接辞の用法のみが見られる。ただし、今期は、例示用法におい

て、たとえられるものの内容が不明⁴な例が見られるようになる。

- (19) 仕方なしに黙認みたいな事をしてるんですが、それで僕は二重の苦しみを受けてる訳ですよ
(久米正雄「学生時代」1918〈大正7〉)

この例では、「僕がしていること」が何なのかははっきりしない。「僕」にとっては、「黙認」という言葉が最も近いということが表されていると思われる。

例示用法の意味変化の他に、以下2点の変化も見られる。

1点は、昭和期の初め頃、活用語の言い切りを承ける例が見られるようになることである。

- (20) a 本当に死にたいなんて考えないのだけれど、私はまるで、兎がひとねむりするみたいに、
死にたいと云うことをころやすく云ってみる。(林芙美子「放浪記」1928〈昭和3〉)
b 広い沙漠に迷いこんだみたいに頼りどころがないのだ。(林芙美子「放浪記」1928〈昭和3〉)
どちらも比況用法の例であると考えられる。

もう1点は、同じく昭和期の初め頃、「-みたいだった」の例が見られるようになることである。

- (21) 私芸者屋にじき売られたから、その小父さんの顔もじき忘れっちゃったけれど……私その
桃千代と云う娘と、広いつるつるした廊下を、よくすべりっこしたわ、まるで鏡みたいだっ
たの。(林芙美子「放浪記」1928〈昭和3〉)

これについても、比況用法の例である。なお、今回の調査資料では、以上の1例が見られたのち、昭和30年代(1960年代)後半に至るまでこういった例は見出せなかった。

●例示用法

以下、大正後期以降、新しく見られるようになった例を挙げる。

- (22) a ねえ、三好先生、吾々は、こう云うふかしたての振りパンみたいなものは頂戴しませんで
したね(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉)
b 組んでトランプをやっていたんだから、四人だった。何処でやっているのかと云うと、そ
れが君の家の庭なんだ。それでいざやろうという段になると、君が物置みたいな所から、
切符売場のようなになった小さい小舎を引張り出して来るんだ。
(梶井基次郎「雪後」1926〈大正15〉)

これらの例では、「-みたい」でたとえられる内容が不明であると考えられる。

(22) aは、話者によると「吾々が見ているもの」は「ふかしたての振りパン」である。その食べ物には名前があるはずだが、話者はそれを知らず、話者の言葉で表していると考えられる。(22) bは、話者が見た夢の話をしており、「君が出て来た所」が何であるかをはっきりと断定することはできないと考えられる。実際のところは分からないが、話者によると「物置」であるということが示されている。

⁴ 答えが存在するものと、正確な答えが存在しないの双方を指す。本稿の例では、(19) (22) bは答えを突き止められず、(22) aは正確な答えを確認しようと思えばできる。ただし、文脈によっては、答えが存在するかどうか判別しにくい場合もある。

つまり、これらの例では、話者によってそう見えた・感じられたということが「-みたい」によって示されており、内容が不明なものが何であるかを仮に示していると考えられる。なお、これらの例では、被修飾語には実質的な意味はなく、「-みたいな+被修飾語」で一つの連体修飾節、あるいは名詞句のような働きをしていると思われる。

これに対し、たとえられる内容が明らかである例も見られる。

(23) a 『お前は大きくなつても決してお父さんみたいな真似をするんぢや無いよ』『うん』

(加宮貴一「糸瓜の漬物」1925〈大正14〉)

b 「そりゃ、のみこめない気はしたさ。だけど、君がいいなずけのために芸者になって、療養費を稼いでると言うんだからね。」

「いやらしい、そんな新派芝居みたいなこと。いいなずけは嘘よ。そう思ってる人が多いわ。」

(川端康成「雪国」1935-1947〈昭和10-22〉)

(24) 一人でぼんやりと考え事をしているのよりも、こうやって二人で一緒に考え合っているみたいな方が、余計自分の頭が活潑に働くのを異様に感じながら、私はあとからあとからと湧いてくる思想に押されてもするかのように、病室の中をいつか往ったり来たりし出していた。

(堀辰雄「美しい村」1933-1934〈昭和8-9〉)

(23) aであれば、「お父さんみたいな真似」で「父親がしたこと」を含めてそれに当たる行為を指し、(23) bであれば「いいなずけのために芸者になって療養費を稼いでいる」ことを「新派芝居」にありそうな事柄を指すと考えられる。(24) については、今していることを取り上げて、「二人で一緒に考え合う」に相当することを指すと考えられる。

これらの例では、現実にかき起している／存在しているものについてたとえており、たとえられるものの内容は明らかである。また、新派芝居というジャンルも、話者にとって一般的な、ありふれたものであると考えられる。この場合、「-みたいな」は「話者が属性を仮に示す」のではなく、たとえるものとたとえられるものが包含関係にある例と考えられる。

また、人称代名詞や時間・期間を承ける「-みたい」の例も引き続き見られる。

(25) a 「へん、お前みてえな唐変木に云ってるんじアねえやい。」

(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉)

b 実際僕みたいな男はよくよくの閑人なんだ

(梶井基次郎「ある崖上の感情」1928〈昭和3〉)

(26) 殺されれば妾本望だわ、こんな軀、いつだって……妾、貴方みたいに臆病じゃないわ

(長与善郎「青銅の基督」1923〈大正12〉)

(27) 「紀ちゃん紀ちゃん、シゼちゃんを忘れちゃったの？ また先みたいにシゼちゃんと汽車ごっこをして遊ばない？ ねえ、遊びましょうよ」

(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉)

(28) 今みたいに、遠くで死にたくないひとが毎日たくさん死んでるときに、なんとなく自分勝手に死んじやうなんて……決して、冬子を責めるわけじゃないの。

(石川淳「マルスの歌」1938〈昭和13〉)

●比況用法

比況用法では意味変化は見られないが、昭和期の初め頃以降、活用語の言い切りを承ける例が見られるようになる。

(29) 私はたいやきを胃のあたりへ置いてみる。きいんと肌が熱くていい気持ちだ。かいろを抱いているみたいだ。(林芙美子「放浪記」1928〈昭和3〉)

(30) 広い沙漠に迷いこんだみたいに頼りどころがないのだ。((20) b再掲)
ル形(用例(20) a参照)・テイル形・タ形が見られる⁵。

名詞接続の例は、前期に引き続き見られる。

(31) a オツベルはやっと覚悟をきめて、稲扱器械の前に出て、象に話をしようとしたが、そのとき象が、とてもきれいな、驚みたくないい声で、こんな文句を云ったのだ。
(宮沢賢治「オツベルと象」1926〈大正15〉)

b 大根の切り口みたいな大阪のお天陽様ばかりを見ていると、塩辛いおかずでもそえて、甘味茶漬けでも食べて見たいと、
(林芙美子「放浪記」1928〈昭和3〉)

(32) a シグナルはもうまるで顔色を変えて灰色の幽霊みたいになって言いました。
(宮沢賢治「シグナルとシグナレス」1923〈大正12〉)

b 成る程、これが新時代であるな、深窓の處女なんて不健康な代物は、豚に喰はれちまへであるな。見よ、とりたての鮎みたいに澁刺たる女性美を、斯くてこそ、ゲエ、ギムギガム、ブルルル、ギムゲムの至りである。
(徳川夢声「世相のスケッチ 洋装の女と朦朧自動車」1925〈大正14〉)

(33) 「似ているかどうか分らないけれど、でもみんなが私のことを混血児みたいだってそう云うわよ」
(谷崎潤一郎「痴人の愛」1924〈大正13〉)

(34) 「全然競争なの。おたがいに抜きっこしてるみたい。息が切れそうになると、もっと息が切れそうなこと代るがわる考え出すの。
(石川淳「マルスの歌」1938〈昭和13〉)

以上の例は、たとえるものとたとえられるものがまったく別の場合である。

これに対し以下は、「-みたいなもの」のような「-みたいな+被修飾語」でたとえる例である。

(35) a 「いいえ、あの方が猿みたいな感じがするでしょ、だからあたし、わざと猿タツて云ってやっ
たんですよ」
(谷崎潤一郎「痴人の愛」1924〈大正13〉)

b それは雲の峯がみんな崩れて牛みたいな形になり、そののあちこちに星がびかびかしたのです。
(宮沢賢治「ひのきとひなげし」1933〈昭和8〉)

(36) a 「こう云う稼業はしておりますが、この人だけはつい近所に一軒別にうちをもたせて置きますし、お座敷に出すようなことは、ただの一遍だってさせやアしませんけれど、その故ばかりではなく、あたしとは反対に、この人はまたちっと変屈な方でして、まるでもう素ッ

⁵ 今回、古い例を挙げたため林芙美子の「放浪記」に偏ったが、堀辰雄・川端康成・石川淳にも活用語の言い切りを承ける例は見られる。

堅気のお嬢さんみたいなものです。 (里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉)

- b よく世の中では会社や銀行の重役なんて盗棒みたいなもんだと思つてゐる人もあるらしいがね、 (白雨楼「財界抜裏物語(一)」1925〈大正14〉)

(31) から (36) については、前期までの比況用法と変わらないと考えられる。

4-4. 話者の判断を示す用法と接辞の用法が見られる時期 —昭和後期^{*6}以降—

今期における最も大きな変化は、話者の判断を示す推量用法が見られるようになることである。

- (37) あなたは大建築家になるよりも、政治家になつてもいい素質があるみたいね。

(石川淳「処女懐胎」1947〈昭和22〉)

推量用法の「-みたい」は、事実関係が不明のことがらについて、話者が推量した内容を示す。そのとき、話者が見たことや聞いたこと、感じたことを根拠として示していると考えられる。

この例では、話者が「あなたは大建築家になるよりも、政治家になつてもいい素質がある」と推量している。これは、話者の観察を根拠とした判断と考えられる。

●推量用法

- (38) a 遠くでこそそそしてるから、かえって藤木だって気にするんですよ、しょっちゅう汐見さんに監視されてるみたいだと、この前言ってた。 (福永武彦「草の花」1957〈昭和32〉)

- b なにふるえていらっしゃるの？ あなた、悪魔にあうのははじめてみたいね。

(井上ひさし「ブンとファン」1970〈昭和45〉)

(38) aは、汐見が遠くでこそそそしていることを根拠として、「(藤木が)しょっちゅう汐見さんに監視されてる」と推量していることが示されている。(38) bは、「なにふるえていらっしゃるの？」とある通り、視覚・聴覚などの知覚によって得たことを根拠として、「あなたは悪魔に会うのははじめて」と推量していると考えられる。

また、昭和期の終わり頃になると、話者が感じていることや考えていることを承ける例も見られるようになる。

- (39) a 「そうすると、おやじの死ぬ頃のことを一番よく知っているのは、山田さんというわけだね」「もちろんそうだ。というと、一郎さんのお母さんに申し訳ないみたいだが」

(吉行淳之介「砂の上の植物群」1963〈昭和38〉)

- b 「だけど法学博士なんて、何だか怖いみたいね。康子さん、どう？ ……怖くない？ ……朝から晩まで法律ばかり考えていて、頭の中は法律だらけの男なんて、愛情が無くなってしまわないかしら」 (石川達三「青春の蹉跎」1968〈昭和43〉)

これらの例は、「申し訳ない」「怖い」といった、話者の感情に関わる言葉を「-みたい」で示している。(38) のような知覚を判断の根拠とする例とは異なる。ただし、話者にとって不明なことに對し、話者の感じていることを「-みたい」で示している点では同様である。

^{*6} 昭和20年(1945年)以降とする。

また、以下の例も推量としてよいと思われる。

(40) a こう申しちゃ悪いのですが、あなたはなんだか病気であることと、寿命が少ないことを自慢しているみたいに聞えるわ (北杜夫「楡家の人びと」1963〈昭和38〉)

b 「円筒ハニワだ！」

彼は夢中で土をかき起した。

「本当にそう？ 只の植木鉢みたいに見えるけど」

(曾野綾子「太郎物語 高校編」1973〈昭和48〉)

(41) 「うちのおふくろかい。……別にこわくはないよ。何だってそんなことを訊くんだ」

「わたし、何だかこわい人みたいな気がしたの」 (石川達三「青春の蹉跎」1968〈昭和43〉)

これらの例では、「あなたが病気であることと寿命が少ないことを自慢している」「土に埋まっているものが何なのか」は不明であり、話者にとって「～に見える／聞こえる／感じられる」ことが示されている。

「(実際のところは不明なことが) 話者にとってどう見えたか」を示す例には、「-みたいだった」も含まれると思われる。

(42) a 「いや、図々しいわけでもない。この前会ったとき、花田は言っていたんだ。おれは痴漢になるぞ、とね。酔ってはいたが、本気な口調だった。それ以外に、生きる道がないみたいだった。」 (吉行淳之介「砂の上の植物群」1963〈昭和38〉)

b 五月さんは少し太ったみたいだった。 (曾野綾子「太郎物語 高校編」1973〈昭和48〉)

これらの例では、「それ以外に生きる道がない」「少し太った」ように見えた、ということが示されている。

●例示用法

前節で取り上げた通り、大正後期には変化が見られるが、今期以降は大きな変化はない。

まず、明治期から見られる例を挙げる。

(43) a 或る日、サバルテスが、君みたいな革新家が、物をとって置くという気持ちがわからぬと言うと、ピカソは答えた、「そりゃ全然違う事だ。」

(小林秀雄「偶像崇拜」1950〈昭和25〉)

b 仕事先の小沢さんという人に、何で大学に、しかも立命みたいな三流大学にきたのかといわれた。

(高野悦子「二十歳の原点」1971〈昭和46〉)

(44) a 「あんたは、村の人らアみたいに岩乗な軀やない。(水上勉「越前竹人形」1963〈昭和38〉)

b お握りみたいにご飯が多いのもいやだけど、小指の先くらいしか、ご飯がないなんて、あれもお鮓じゃないわね。

(曾野綾子「太郎物語 大学編」1979〈昭和54〉)

人称代名詞を承ける「-みたい」は、(43) bのような固有名詞や、(44) aのような(人の)集団を表す名詞、(44) bのような普通名詞も承けるようになる。

時間や期間を承ける例も前期と同様に存する。

(45) うちはそので、女中みたいなことしてて、いまみたいなことはしてエしまへなんだんぞす」
喜助は新しいことを聞くと思った。玉枝は島原の娼妓を辞めて、芦原へきて、いったん堅気
になったものと思われる。ところが、それから間なしに「花見家」へうつって、昔の商売に
逆もどりしたとみてよかった。 (水上勉「越前竹人形」1963〈昭和38〉)

(46) a このごろみたいに防空演習ばかりあると、船乗りのよめさん、いのちぢぢめるわ。
(壺井栄「二十四の瞳」1952〈昭和27〉)
b とくに、きょうみたいに暑い日に、なにも食わずに労働すれば、誰だって頭がへんになる。
(三浦哲郎「驢馬」1957〈昭和32〉)

続いて、大正後期以降に見られる、話者によってそう見えた・感じられた内容が「-みたい」によっ
て示される例を挙げる。

(47) a 女は雑誌社のひとのようで、堀木にカットだか、何だかをかねて頼んでいたらしく、それ
を受取りに来たみたいな具合でした。 (太宰治「人間失格」1948〈昭和23〉)

b 「スポーツや学問ならいいけど、あの人達には、自分達以外の人間は、人間でないみたい
な物の考え方があるのよ」 (曾野綾子「太郎物語 高校編」1973〈昭和48〉)

これらの例では、「-みたい」によってたとえられる内容が現実に取り起きている／存在していること
であり、その内容は明らかである。

以下は、「-みたい」によってたとえられる内容が不明の例である。

(48) a 戦闘機モ丸デ下手デアルサウナ、初陣ミタイナ奴バカリデ実ニ心許ナイ。
(北杜夫「楡家の人びと」1963〈昭和38〉)

b 「いつかこの帰りに」と栄二が云った、
「三人のやくざみてえなやつにからまれたことがあったっけ」
(山本周五郎「さぶ」1963〈昭和38〉)

これらの例では、話者によってそう見えた・感じられたということが、「-みたい」によって仮に
示されていると考えられる。

●比況用法

比況用法についても、前期と大きく異なるない。

(49) a 「あいつはまったく流れ星みたいな奴だよ。(立原正秋「冬の旅」1968-1969〈昭和43-44〉)

b 「ばあっと花が咲いたみたいな、おきれいな方どしたえ」。
(宮本輝「錦繡」1982〈昭和57〉)

(50) a 彼女は、私を見ると、こぼれるように笑って、タオルに包んだ猿みたいな赤児を見せる。
(三浦哲郎「恥の譜」1961〈昭和36〉)

b やせ馬みたいな市電を指さして、あれで行くとかんばって一歩もひかないのである。
(五木寛之「風に吹かれて」1972〈昭和47〉)

(51) a 父は病み衰え、貧相で、粉っぽい肌をしているのに、道詮和尚は、まるで桃いろのお菓子

みたいに見えた。 (三島由紀夫「金閣寺」1956〈昭和31〉)

- b それができようはどうしたことかしら、鳥のくちばしでつつかれてるみたいに痛くて、めまいや嘔きけまでして……でもおかげさまで、もうすっかりいいわ

(倉橋由美子「聖少女」1965〈昭和40〉)

- (52) a 医師は私の手記を、記憶の途切れたところまでを読み、媚びるように笑いながらいった。
「大変よく書けています。まるで小説みたいですね」 (大岡昇平「野火」1952〈昭和27〉)
- b 「お餅も、蜜柑も、どっちもかちんかちんに凍っちゃってるんですよ。まるで、ガラスでできてるみたい。」 (三浦哲郎「初夜」1961〈昭和36〉)

以上は、修飾語(たとえる言葉)と被修飾語(たとえられる言葉)がまったく異なる例である。

- (53) a 「や、どうも、パイプというやつは子供のおしゃぶりみたいなものでね、つい夢中になっちゃまう……」 (開高健「パニック」1957〈昭和32〉)
- b それにくらべたら、あんたのピストルの弾丸の速さなんて、時計の分針みたいなものよ」 (井上ひさし「ブンとファン」1970〈昭和45〉)

- (54) a 野菜や魚が入荷しないとってみんながあわてて、私は東京の配給になれていたから、かえっておかしく、新潟は時おり、港に機雷をおとすとかいうB二九があらわれたけど、しごく平穏で、戦争が嘘みたいだった。 (野坂昭如「アメリカひじき」1967〈昭和42〉)
- b そりゃもう、まるで人が変わったみたいだったね。

(筒井康隆「エディプスの恋人」1977〈昭和52〉)

以上は、「-みたいなもの」など「-みたいな+被修飾語」で何かをたとえている例である。

4-5. 共起副詞に見られる意味・用法の差異 一例示用法・比況用法・推量用法一

昭和後期より見られる推量用法を加え、再度、共起する副詞について検討する。ここでは、大正後期から昭和前期までの例について検討する。

まず、「まるで」は、4-2で述べた通り、比況用法の例において共起する。

- (55) 私芸者屋にじき売られたから、その小父さんの顔もじき忘れっちゃったけれど……私その桃千代と云う娘と、広いつるつるした廊下を、よくすべりっこしたわ、まるで鏡みたいだったの。 (林芙美子「放浪記」1928〈昭和3〉)

- (56) ここから迎えに行った人？ 東京の人？ まるで母親みたいで、僕は感心して見てたんだ。 (川端康成「雪国」1935-1947〈昭和10-22〉)

- (57) 今日の俺は、まるで子供みたいに憤怒したな。 (北杜夫「楡家の人びと」1963〈昭和38〉)

一方で、昭和期以降になると、「まるで」以外にも「何か」や「何だか」が共起する例が見られるようになる。

- (58) 私はもう娘ではないけれど、何だか、娘さんみたいな気持ちになって来る。

(林芙美子「放浪記」1928〈昭和3〉)

- (59) そんな院長の言葉が自分の耳の中であががするような気がしながら、私はなんだか思考力

を失ってしまった者みたいに、いましがた見て来たあの暗い不思議な花のような影像をそれらの言葉とは少しも関係がないもののように、それだけを鮮かに意識の闕に上らせながら、診察室から帰って来た。
(堀辰雄「美しい村」1933-1934〈昭和8-9〉)

(60) a 五月さんは、オレンジ色のワンピースのユニフォームを着て、緑色の小さなエプロンをかけていた。何だか、オレンジが人間になったみたいだった。

(曾野綾子「太郎物語 高校編」1973〈昭和48〉)

b 私は両手でロープを握り、体をいくぶん前後に揺らせてはずみをとりながら、一步一步と上へのぼっていった。なんだか空中ブランコ映画のシーンみたいだった。

(村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」1985〈昭和60〉)

ただし、「何だか」「何か」は、例示用法の例とも共起する。

(61) 「あそこに、ほら、昨日の雨で流されたみたいな土の部分に、何か破片みたいなものが突き出ているように見えるでしょう」
(曾野綾子「太郎物語 高校編」1973〈昭和48〉)

この例では、たとえられるものの内容が不明である。

「何だか」や「何か」は、話者の確信が持てない場合に共起する副詞である。(58)は「気持ち」を示している点、(59)～(61)は話者の回想である点が関係しそうに思われる。

さらに、不明なもの・ことに対して「-みたい」が用いられる推量用法でも、「何だか」と共起する例が見られる。推量用法のほうが、比況用法・例示用法に比べて共起する例の割合が高い⁷。

(62) a 「よく判ったわ。それじゃ、あくがれは家出ということになっちゃうようね。家出もいいけど、わたくし、ただのあくがれの家出よりも、やっぱりあこがれの的に家出したいわ。」

「なんかあなたが家出するはなしみたいね。
(石川淳「処女懐胎」1947〈昭和22〉)

b 「あの——今の女の人、切符を持っていなかったんですか？」

「そうなんですよ。その分の罰金は取り立てます」

「でも何だかよほどのことで気が転倒してるみたい……。今日は大目に見てあげて下さいません？」
(赤川次郎「女社長に乾杯！」1982〈昭和57〉)

(63) いまの人たち、なんか気持ちがあそび半分みたいで、見ていてはらはらするわ。

(三浦哲郎「忍ぶ川」1960〈昭和35〉)

(64) 私は金子との会話のあらましを告げた。そして、言った。

「金子さん、なにか君をほしいみたいだったぜ」
(沢木耕太郎「一瞬の夏」1978〈昭和53〉)

以上のことから、「何だか」「何か」は比況用法・例示用法・推量用法と共起する副詞であることが明らかである。今回の調査では、昭和期の初め頃から共起している。

また、推量用法では、「どうやら」「どうも」も共起する。

(65) 俺はどうやら自分で考えていたよりずっと弱ってるみたいだ。

(村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」1985〈昭和60〉)

(66) 感心しながらこれはどうもひどく変わった会社に入ってしまったみたいだなあ、とブロンディ

⁷ 「何か」「何だか」と共起する19例中11例が推量用法である。

の童顔を見ながら考えていた。(椎名誠「新橋烏森口青春篇」1985-1987〈昭和60-62〉)
「どうやら」「どうも」が推量表現と共起する副詞であることは、「-らしい」「-ようだ」と共起することからも明らかであり、「-みたい」が推量を示すことを裏付けるものと考えられる。

4-6. 近年に見られる意味・用法

ここでは、近年に見られるようになった新たな意味・用法を2つ取り上げる。今回の調査資料では、昭和期の終わり頃に用例が得られた。

1つめは、文末において連体形「-みたいな」が用いられる例である。

(67) 今回、編集部からの指令は“川柳本を調査せよ！”である。川柳って、五七五のアレですか。

あの、俳句の親戚みたいな。(『ダ・ヴィンチ』No.6 1994.10.6〈平成6〉)

このような文末の「-みたいな」は、1990年代の先行研究では主に若者言葉の一環として扱われていた。近年では、文末の「-みたいな」のみが取り上げられ、先行文脈の解説や言い換えとして用いられていることや、引用表現であることが指摘されている。

若者言葉として分析されるものには佐竹(1995)(1997)などが挙げられる。佐竹(1995)(1997)は、若者言葉を広く取り上げられており、文末の「-みたいな」は「断定を避けることによって表現を和らげる」もののなかに含まれている。文末の「-みたいな」の意味用法を検討したものとしては、前田(2004)や加藤(2005)などが挙げられる。前田(2004)では、文末の「-みたいな」の成立について以下の通り述べられている。

「-みたいな」は、一般の名詞の前に現れて、推量・例示・比喩を表すこともあるが、(6)～(9)のような「みたいなことを言う」「みたい発言」、あるいは「みたい感じ」という形で、発話および思考の内容を「みたいな」が直接引用的に受け取る用法もある。この用法で、さらに後ろに来る名詞と述語部分を省略することから、文末「みたいな。」が生じたものであろう。あるいは、話者自身の発話あるいは思考を「(それは)……みたいなことだ。」という判断の形でまとめ上げる表現から、生じたものであろう。

以上に挙げた通り、先行研究で明らかにされている部分の多い用法だが、いつ頃から・どのように用いられているかについては、未だ検討の余地がありそうである。

もう1つは、発話の始めに「-みたい」が用いられる例である。

(68) 「個人でつくって、出版するのが簡単なんですって。自費出版みたいなもんですね」

「ほほう。個人で簡単につくれるんだ」

「みたいですね。ライターとしては魅力的な話ですよ」

(『ダ・ヴィンチ』No.16 1995.8〈平成7〉)

この例では、相手の「個人で簡単につくれる」という推量内容を承けて、「(個人で簡単につくれる)みたいですね」と話者が答えているのではないかと思われる。その際、括弧内は省略され、「みたい」

は発話の始めに用いられる。このとき、「-みたい」は、話者が推量している内容を示すのではなく、自分の推量内容が相手の推量内容と同じであるという傾き、いわば相槌のような役割をしているのではないかと思われる。

以上に挙げた2用法は、雑誌や漫画といった話し言葉を反映する資料に見出せる。これまでに検討してきた比況・例示・推量の3用法とは異なる視点での分析が必要と思われる。意味・用法が成立する詳細な経緯については、今後の課題としたい。

4-7. まとめ

4節において述べてきたことをまとめると、以下の通りである。

「-みたい」は、明治（後期）から大正前期にかけては接辞であり、例示用法と比況用法が見られる。大正後期以降、例示用法の意味が2通りに分かれる。1つは前期から引き続き見られる「たとえるものとたとえられるものが包含関係にある」例である。これに加えて、「内容が不明なものに対し、話者にとってどう見えたか／感じられたかを示す」例が見られるようになる。また、昭和前期、比況用法において、活用語の言い切りを承ける例が見られるようになる。これは統語的に大きな変化であり、推量用法の成立に少なからず影響している。

以上の経緯により、昭和後期以降、推量用法が見られるようになると考えられる。

共起副詞に着目すると、比況用法は引き続き「まるで」と共起する。一方で、「何か」「何だか」といった副詞も共起するようになる。「何か」「何だか」は例示用法・推量用法でも共起し、特に推量用法において共起する割合が高い。推量用法とのみ共起する副詞として、「どうやら」「どうも」が挙げられる。

その後も、「-みたい」の意味・用法は少しずつ変化し、もとの例示用法・比況用法・推量用法は保持したまま、文末の「-みたいな」や、発話の始めの「-みたい」が新たに見られるようになる。

以上のことから、「-みたい」の意味変化は、①明治期～大正前期・②大正後期～昭和前期・③昭和後期以降・④昭和期の終わり頃と大きく4期に分けられることになるのではないかと考える。

5. 「-みたい」の意味変遷

4節に述べた通り、推量用法は昭和後期頃から見られる。先行研究でも指摘があるように、不明なもの・ことに対して、話者が（知覚によって得た根拠を元に）推量した内容を示す点が、接辞の用法とは大きく異なる。

この推量用法が成立する契機として、大正後期以降に、以下のような、たとえられるものの内容がはっきりと分かっていない例が見られるようになることが重要なのではないかとと思われる。

(69) a 「なんですか、気遣いみたいな人が来て……」

「どこに」

声をひそめて、

「そら、ついそこに立ってますよ」

窺いてみると、三吉が、前に手をにぎり合わせ、免状を貰う子供のようなしおらしい容子をして、じっと頸をうなだれていた。(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉)

- b 「この中にはいっているあんこみたいなものは、なんです。」

「それかい。それ、ジャムだよ。」

「へえ、ジャムってんですか。うまくなって、舌がとけちゃいそうですね。」

(山本有三「路傍の石」1937〈昭和12〉)

- c ドアをあけて、署長室にはいったとたんに、

「おう、いい男だ。これあ、お前が悪いんじゃない。こんな、いい男に産んだお前のおふくろが悪いんだ」

色の浅黒い、大学出みたいな感じのまだ若い署長でした。

(太宰治「人間失格」1948〈昭和23〉)

- d 少し解せないのは、小豆みたいなものと、ウドンの切っ端が、混入してることである。もつと不思議なのは、赤丸印西洋煙草の包紙の断片らしきものが、泳いでることであつた。

(獅子文六『自由学校』1951〈昭和26〉)

- e 一度、そんな季節に京成電車の市川真間駅で永井荷風に出会ったことがあった。寒い日で、その作家は集金バッグみたいな袋を膝の上に握りしめて私の向い側に坐っていた。あの老作家も、たぶん浅草に出かけるところだったにちがいない。

(五木寛之「風に吹かれて」1972〈昭和47〉)

これらの例では、「-みたい」によってたとえられているものの内容が分かっておらず、話者などによって「～に見える／感じられる」ということが示されているのではないかと考えられる。たとえば、(69) aでは、話者が「三吉」という人物を知らず、話者からは「気違い」に見えているということが示されている。

こういった不明なものに対し、「～に見える／感じられる」ことを示す用法は、推量用法へと繋がっていくのではないと思われる。

昭和後期に見られる、

- (70) 「相場がきまっちゃえば、あとはなんにもしないでお酒のんでるの。実際の身の振方はあいかわらずそれだけなの。先生は古典的自我っていうんじゃないかしら。近代的自我じゃないみたいね。」

(石川淳「処女懐胎」1947〈昭和22〉)

のような、推量用法の例についても、内容が不明であるものに対し、話者が見たこと、感じたことを踏まえて、「-みたい」を用いている。

6. おわりに

以上の通り、「-みたい」の史的変遷について検討した。今回は主に比況用法・例示用法・推量用

法の3用法がいつ頃から用いられているかということが明らかにしたが、これらをまとめると、次表の通りである。

時代	明治(後)	大正(前)	大正(後)	昭和(前)	昭和(後)
意味・用法					
比況用法					
例示用法 包含関係					
例示用法 不明関係					
推量用法					

近年に見られるようになった新しい用法については、未だ調査が不十分であり、意味・用法に関する詳細な検討も必要であると考えられるため、稿を改めて論じたい。

【参考文献】

- 内田賢徳 (1977) 「「ようだ」「みただ」の転用について」『国語国文』 46-5
- 加藤陽子 (2005) 「話し言葉における発話末の「みたいな」について」『日本語教育』 124
- 北原保雄編 (2004) 『問題な日本語』大修館書店 pp.147-149
- グループ・ジャマシイ (2000) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版 1998年第1刷発行 2000年上製版第一刷発行 pp.560-563
- 杉 捷夫 (1956) 「再び「みたい」について、など」『言語生活』 62
- 鈴木 浩 (2002) 「近世上方語のミルヤウナ ——ミタイダ成立前史——」『文芸研究』 87
- 田島 優 (2004) 「漱石作品における語の習熟 —「みたようだ」から「みただ」への変遷—」『語彙研究の課題』和泉書院
- 鶴橋俊宏 (2002) 「江戸語の比況表現——ミルヨウダ・ミタヨウダについて——」『言語文化研究』 1
- 原口 裕 (1974) 「「みたやうだ」から「みただ」へ」『静岡女子大学国文研究』 7
- 前田直子 (2004) 「文末表現「みたいな。」の機能」『月刊言語』 vol.33
- 前田直子 (2006) 『「ように」の意味・用法』笠間書院
- 三宅知宏 (1994) 「認識的モダリティにおける実証的判断について」『国語国文』 63-11
- 三宅知宏 (1995) 「「推量」について」『国語学』 183
- 三宅知宏 (2006) 「「実証的判断」が表される諸形式 —ヨウダ・ラシイをめぐって—」『日本語文法の新地平2』益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編 くろしお出版
- 宮地幸一 (1968) 「「～みたやうだ」から「～みただ」への漸移相」『国語国文学』 3
- 森山卓郎 (1995) 「推量・比喩比況・例示 —「よう／みたい」の多義性をめぐって—」『日本語の研究 宮地裕・敦子先生古稀記念論集』明治書院

【用例出典】

- 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社 1995年
- 宮沢賢治 「シグナルとシグナレス」「ビジテリアン大祭」「オツベルと象」「ひのきとひなげし」「セロ

弾きのゴージュ 谷崎潤一郎「痴人の愛」梶井基次郎「城のある町にて」「雪後」「冬の日」「ある崖上の感情」林芙美子「放浪記」堀辰雄「美しい村」川端康成「雪国」石川淳「葦手」「マルスの歌」「かよい小町」「処女懐胎」山本有三「路傍の石」竹山道雄「ビルマの豎琴」太宰治「人間失格」小林秀雄「偶像崇拜」「真贋」大岡昇平「野火」壺井栄「二十四の瞳」三島由紀夫「金閣寺」松本清張「点と線」福永武彦「草の花」開高健「パニック」「巨人と玩具」「裸の王様」三浦哲郎「驢馬」「忍ぶ川」「初夜」「恥の譜」「帰郷」「團樂」大江健三郎「死者の奢り」「他人の足」「飼育」「人間の羊」「戦いの今日」井上靖「あすなる物語」安部公房「砂の女」水上勉「雁の寺」「越前竹人形」吉行淳之介「砂の上の植物群」司馬遼太郎「国盗物語」北杜夫「楡家の人びと」山本周五郎「さぶ」倉橋由美子「聖少女」井伏鱒二「黒い雨」遠藤周作「沈黙」有吉佐和子「華岡青洲の妻」野坂昭如「火垂るの墓」「アメリカひじき」「ラ・クンバルシート」「プアボーイ」立原正秋「冬の旅」石川達三「青春の蹉跎」三浦綾子「塩狩峠」新田次郎「孤高の人」井上ひさし「ブンとファン」渡辺淳一「花埋み」高野悦子「二十歳の原点」五木寛之「風に吹かれて」池波正太郎「剣客商売」曾野綾子「太郎物語 高校編」「太郎物語 大学編」阿川弘之「山本五十六」筒井康隆「エディプスの恋人」藤原正彦「若き数学者のアメリカ」星新一「人民は弱し、官吏は強し」沢木耕太郎「一瞬の夏」田辺聖子「新源氏物語」宮本輝「錦繡」赤川次郎「女社長に乾杯！」村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」椎名誠「新橋烏森口青春篇」

『CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪』新潮社 1997年

田山花袋「蒲団」「田舎教師」長塚節「土」夏目漱石「行人」「彼岸過迄」「明暗」

『CD-ROM版 新潮文庫 大正の文豪』新潮社 1997年

有島武郎「或る女」徳田秋声「あらくれ」「縮図」倉田百三「出家とその弟子」久米正雄「学生時代」葛西善三「暗い部屋にて」「仲間」「酔狂者の独白」里見弴「多情仏心」長与善郎「青銅の基督」

『太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース』国立国語研究所編 博文館新社 2005年

小川未明「悪人」里見弴「恐ろしき結婚」上司小剣「狐火」「暴風雨の夜」加能作次郎「漁村賦」中村星湖「みじか夜」谷崎精二「淋しけれども」福永渙「治作と米造」オ・ヘンリー「人間磁気」「結婚月『五月』」「滑稽小説 博愛数学講座」白雨楼「財界抜裏物語（一）」三上於菟吉「長篇小説 蛇人（第六回）」「長篇小説 蛇人（第十一回）」徳川夢声「世相のスケッチ 洋装の女と朦朧自動車」江木翼（談話）「税制行政の整理を論じて善意の苛政を呪ふ」加宮貴一「糸瓜の漬物」稲垣足穂「タルホ五話（クリスマスの夜の前菜）」

『ダ・ヴィンチ』リクルート